

神殿の再建：礎を据える エズラ 3:10-13

1. 建築師たちが主の神殿の礎を据えたとき、イスラエルの王ダビデの規定によって主を賛美するために、祭服を着た祭司たちはラッパを持ち、アサフの子らのレビ人たちはシンバルを持って出て来た。(3:10)
 - a. 祭壇（自然のものと超自然的なものが交差する場所）が築かれた後、神殿再建の次のステップは礎を据えることであった（物理的な礎）。人々が正しく礼拝できるようダビデの規定により祭司とレビ人たちが任命、配置された（霊的な礎）。
 - b. ダビデが王になる以前は、礼拝とはおもにいけにえをささげることをいったが、ダビデが王になって以降は最初の神殿が建つ前から神への礼拝の一つの手段として楽器を使って朝晩賛美が捧げられた。礼拝とはいけにえを捧げるだけでなく、神と深く交わるという行為になった。
 - c. このような礼拝の形は、天で神が礼拝される形として黙示録の中にも見られる（黙示 4:8-11）。私たちは日曜日の朝の礼拝で何曲か賛美をするかもしれないが、真の礼拝とは一日中休みなく行われるものである。礼拝とは賛美を含むライフスタイルそのものであるが、大切なのは私たちの全存在を捧げることである。
2. そして、彼らは主を賛美し、感謝しながら、互いに、「主はいつくしみ深い。その恵みはとこしえまでもイスラエルに。」と歌い合った。こうして、主の宮の礎が据えられたので、民はみな、主を賛美して大声で喜び叫んだ。(3:11)
 - a. 聖書の中にはこれとまったく同じ引用が数か所に見られるが、それが詩篇の著者によるものなのか、礼拝用の経典から取られたものかは定かではない。エレミヤがエルサレムの荒廃以降にもう一度この言葉が聞こえると預言しているのは興味深い（エレミヤ 33:10）。
 - b. ここで歌われている言葉を見てみよう。「主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで。」人生は良いことばかりではないし、愛されていないと覚えることもあるだろう。しかし神は恵み深くその愛はとこしえに変わることがない。
 - c. 建物の礎というのはとてつもなく大切である。すべては礎の上に建てられており、礎に問題があると上に行けば行くほどそれは大きくなるからである。
3. しかし、祭司、レビ人、一族のかしらたちのうち、最初の宮を見たことのある多くの老人たちは、彼らの目の前でこの宮の基が据えられたとき、大声をあげて泣いた。一方、ほかの多くの人々は喜びにあふれて声を張り上げた。そのため、だれも喜びの叫びと民の鳴き声とを区別することができなかった。民が大声をあげて喜び叫んだので、その声は遠い所まで聞こえた。(3:12、13)
 - a. ところがこのような喜ばしい時にあっても老人たちはこの礎が以前のものと比べると立派でなかったので泣き叫んだ。若い世代の者は比較数するものがなく、この建物しか知らないの喜び叫んだ。
 - b. それが何の叫びなのかだれも区別することができなかった。老人たちが大声で泣き叫ぶことが良かったのかどうかはわからないが、もしかしたらこれは神殿完成の遅れをもたらす不満の始まりであったかもしれない。
 - c. 礼拝する時の私たちの態度はとても重要である。イエスは人の心を評価される。どれだけ才能や実力があるかということではない。今日あなたの心はどこにあるだろうか？